

天皇杯・農林水産大臣賞受賞

海と山の絆で苦難を超えて 次世代にしなやかにつなぐ

いりや さとやまかつせいかきょうぎかい
受賞者 入谷の里山活性化協議会

もとよしぐん みなみさんりくちょう
(宮城県本吉郡 南三陸町)

■地域の沿革と概要

南三陸町は、宮城県の北東部に位置し、三陸海岸の南部に属する町である。地理的には、東側が志津川湾及び伊里前湾に面しており、海に開かれた立地となっている。一方、西・北・南の三方は、標高300mから500mの山々に囲まれており、自然の地形に恵まれた地勢を有している。

町の大きな特徴としては、里・山・海が調和した、自然豊かで美しい環境に恵まれている点である。特に沿岸部には、リアス式海岸特有の複雑に入り組んだ海岸線が広がっており、これらの景観は、三陸復興国立公園の一部を形成している。

町は、海に面した「志津川」「歌津」「戸倉」の三地区と、内陸部に位置する「入谷」地区の、計四つの地区によって構成されている。平成23年に発生した東日本大震災においては、町内の6割以上の家屋が全壊するなど、生活基盤が大きく損なわれる甚大な被害を受けている。

■むらづくりの概要

1. 地区の特色

入谷地区は、宮城県南三陸町の西北部に位置する農村地域であり、町の総人口約12,000人のうち、約1,700人がこの地区で暮らしている。周囲を山々に囲まれた地形の中に、美しい里山の景観が広がり、豊かな森や田畑が点在する、自然と共生する暮らしが息づく地域である。

第1図 南三陸町の位置



事項	内容	
地区の規模	旧市町村の集団等	
組織の性格	機能的な集団等	
人口等	総人口	1,720人
入谷地区	総世帯数	653戸
農業経営体数	農業経営体数	153経営体
(内訳)	個人経営体数	148経営体
南三陸町	団体経営体数	5経営体
	(内、法人経営体数)	4経営体
農用地の状況	総土地面積	3,709ha
(内訳)	耕地面積	155ha
南三陸町	田	68ha
	畑	87ha
	耕地率	4.2%
	一経営体当たり耕地面積	1.0ha

出典 令和2年国勢調査、2020年農林業センサス

第1表 地区の概要

かつてこの地域は、砂金が豊富に採れたことで知られ、「入谷千軒」と呼ばれるほどの賑わいを見せた時期があり、江戸時代にはゴールドラッシュのような活況を呈し、多くの人々がこの地に集まったが、砂金が掘り尽くされた後は、地域の経済を支える新たな産業の創出が求められるようになった。

その後、江戸時代中期に入谷出身の山内甚之丞（やまのうち じんのじょう／1695～1778）によって養蚕と生糸製造の技術が地域にもたらされ、入谷は仙台藩における養蚕の発祥地として絹糸の生産で大きく栄えることとなった。この歴史は、現在でも繭細工の技術や養蚕文化の継承を通じて地域の誇りとして息づいており、入谷の歴史文化の軸となっている。

現代の入谷地区では、米・野菜・果物などを中心とした農業、牛や豚などの畜産業、そして山林資源を活かした林業が主な産業となっている。

しかしながら、近年では高齢化の進行と若年層の地域離れにより、農林畜産業の担い手不足が深刻な課題となっている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 「入谷の里山活性化協議会」以前の取組

入谷地区では、地域の魅力やアイデンティティを守り、次世代へと継承していくための取り組みが、昭和の時代から始まり、昭和61年には、「地域全体が一体となって取り組まなければ、真の地域活性化は実現できない」という強い想いのもと、地域住民による自主的な組織「入谷を考える会」が発足した。

その後、平成3年には、入谷地区の全行政区が参加する形で「グリーンウェーブ入谷構想促進委員会」を立ち上げ、「来てもらわないと、入谷の良さは伝わらない」という考え方を基本に据え、地域に眠る潜在的な資源、史跡、文化財などを掘り起こし、それらを整備・活用することで、地域内外の人々との交流の場を創出してきた。

このように入谷地区は、東日本大震災前から、地域にある自然の恵みや伝統文化を活かした学びの場の提供や交流の促進、観光・交流人口の増加を目的として、農業体験、モノづくり体験、調理体験などの体験プログラムの開発や民泊事業なども含め、グリーン・ツーリズムに力を入れていた。

イ 「入谷の里山活性化協議会」の設立

東日本大震災において、内陸部に位置する入谷地区は、町内の他の地域と比較して被害が相対的に少なかったことから、震災直後より復興支援の拠点として重要な役割を担うこととなった。入谷地区は、沿岸部で甚大な被害を受けた地域の復旧・復興活動を支援する立場にあり、地域住民の間には「まずは沿岸部の復興を優先すべきである」という意識が強く根付いていた。そのため、震災後しばらくの間は、



写真1 グリーンウェーブ入谷の皆さん
※志津川町町制施行110周年記念誌より

入谷地区独自の地域活性化に取り組むことに対して遠慮や慎重な姿勢が見られ、地域内で活性化の機運を高めることが難しい状況が続いていた。

しかし、震災から10年という大きな節目を迎えた令和3年、新型コロナウイルス感染症の影響が続く中で、地域の中心的な役割を担ってきた住民たちの間に、「このまま支援する側にとどまり続けているだけでは、震災以前から地道に積み重ねてきた入谷地区の地域づくりの取り組みが、次世代に継承されることなく失われてしまうのではないか」という危機感が芽生え、地域の未来を担う若者たちの育成や、新たな事業の創出を通じて、入谷地区の持続的な発展を目指す動きが本格化し、地域住民の有志によって「入谷の里山活性化協議会」が設立された。

ウ 現在に至るまでの経緯

入谷の里山活性化協議会は、これまでに、コロナ禍においても人々を受け入れることが可能となる農泊の基盤整備をはじめとして、地域資源である農地の有効活用を目的とした環境整備、新たな体験型観光プログラムの企画・開発、地域の食文化の魅力を発信するためのメニュー開発、さらにはグリーン・ツーリズムにおける新たな担い手となるインストラクターおよびコーディネーターの人材育成など、多岐にわたる取り組みを実施してきた。

加えて、地域社会においては、東日本大震災を契機として、外部からの関係人口や移住者の受け入れを積極的に進めてきた経緯がある。現在では、地域に根ざした文化や伝統的な生業の継承を目的として、農業・林業・郷土文化の保存・継承など、さまざまな分野において、移住者を含む地元の若者たちと協働しながら、地域活性化に向けた活動に精力的に取り組んでいる。



写真2 里山体験学習パンフレット
※入谷の里山ねっとより

(2) むらづくりの推進体制

ア 組織体制、構成員の状況

入谷の里山活性化協議会は、入谷地区における地域資源の活用と持続可能な地域づくりを推進するために設立された団体であり、地域の「食」「体験」「宿泊」といった観光・交流の主要な要素を担う施設や団体が構成員として加盟している。協議会の中心的な構成員としては、「南三陸研修センター（南三陸まなびの里 いたりやど）」、「さんさん館事業運営組合」、「ひころの里コンソーシアム」、「南三陸YES工房」、「南三陸農工房」、「入谷サン直売所」の6団体であり、地元住民と来訪者をつなぐ重要な役割を担っている。

これらの団体は、それぞれが独自の強みと特色を有しつつ、協議会の活動を通じて連携し、地域全体の活性化に寄与している。さらに、団体の構成員とは別に、協議会が独自に育成したグリーン・ツーリズムのインストラクターやコーディネーターの有資格者も所属

しており、地域の魅力を伝える専門的な人材として、体験プログラムの企画・運営や来訪者への案内など、多岐にわたる活動を担っている。

構成メンバーは、20代から70代までと幅広い年齢層にわたり、地元出身者と移住者が混在し、男女を問わず和気あいあいと活動に取り組んでいる。

第2図 組織体制図



イ 連携してむらづくりを行う他の組織、団体及び行政との関係

入谷の里山活性化協議会は、体験受け入れなどの取り組みにおいて、10を超える団体と連携している。各分野で活動する団体が個別に発信している情報を、協議会が立ち上げたホームページ「入谷の里山ねっと」に集約することで、情報の一本化を図っている。さらに、事務局を務める「南三陸研修センター」が体験受け入れの調整役を担うことで、円滑な受け入れ体制の構築にもつなげている。

なお、協議会では、内陸地域ならではの独自コンテンツの開発を大切にしながら、「海と共に生きる町だからこそ、健全な山を保つことの重要性」を発信している。そのため、ツアーの受け入れにあたっては沿岸地域とも連携しており、南三陸町の観光の窓口である一般社団法人南三陸町観光協会とも協力体制を築いている。

第3図 入谷の里山ねっとホームページ



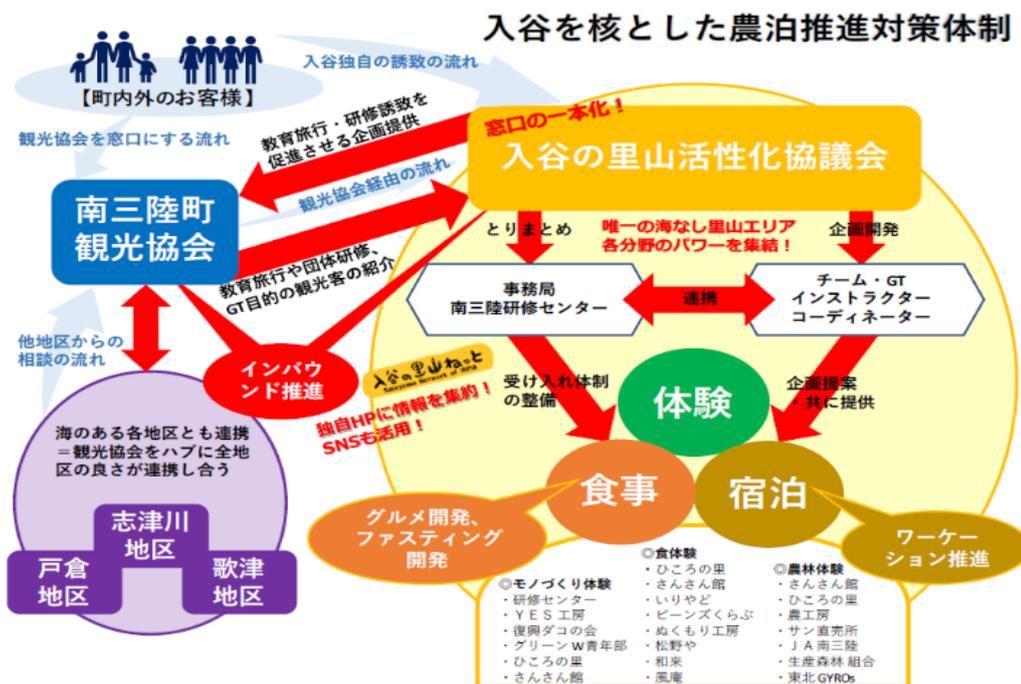
ウ 各集落の住民の当該集団等や連携する他の組織、団体との関係及び参加状況等

グリーン・ツーリズム体験では、地域のシンボルである「童子山（どうじさん）」や、パワースポット「神行堂山麓（しんぎょうどうさんろく）の巨石」などを巡るツアーコー

ス近くの集会所の活用や、農家との連携による景観整備などに取り組んでいる。

また、入谷地区で農業を営む女性たちによる「ビーンズクラブ」、女性が活躍できる社会を目指す「ウィメンズアイ」、そして「入谷八幡神社」などと連携し、イベントの企画や体験受け入れ、食の提供などを行っている。

第4図 推進体制図



■むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

入谷の里山活性化協議会では、老若男女を問わず意見を交わし、それぞれの立場からアイデアを出し合いながら、新たな取り組みを進めている。

たとえば、地域の食に関わる女性たちは、多様なニーズに対応したビーガン料理などのメニュー開発に取り組んでいる。また、グリーン・ツーリズムのインストラクターやコーディネーター研修を受けた若い世代は、時代のニーズに合った新しい体験メニューやツアーを次々と生み出している。

さらに、年配の方々からは「かつて入谷が砂金の採れた地域であることを伝えるツアーを開発したい」といったアイデアも寄せられており、若者や地域外の人々の視点とともに、長年地域を支えてきた先輩方も一体となって、協議会の活動に取り組んでいる。

入谷の里山活性化協議会が大切にしているのは、地域の「古き良き」ものを尊重



写真3 入谷の里山活性化協議会メンバー

し、地域の先輩方に活躍してもらいながらも、よそ者や若者を受け入れ、多様な価値観を取り入れて共に輝いていくことである。そのため、すでに長年にわたって築かれてきた取り組みは守り続ける努力を重ね、時代の変化とともに課題に直面してきたものについては、皆で考えながら解決を図っている。

また、新たな風を吹き込む存在であるよそ者や若者の活躍の場は、地域の先輩方が支えながら育てていくという関係性が築かれている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 農地等の維持・活用

構成員である「南三陸農工房」では、農場でさまざまな野菜を育てており、農作業体験や収穫体験を通じて、町外からの来訪者との交流を促進し、地域のファンづくりに取り組んでいる。こうした農業体験をきっかけに、若者の新規就農者が誕生したほか、地域で活動する里山保全団体も新たに立ち上がるなど、地域に根ざした新たな動きが生まれている。

また、グリーン・ツーリズム体験の一環として、収穫体験・調理体験・販売会を組み合わせることで、野菜などの流通にも貢献しており、これにより、地域の農産物の魅力を広く発信するとともに、生産から消費までを体験できる機会を提供し、地域と来訪者とのつながりを深めている。

里山保全活動を開始した団体では、地域の山の手入れによって発生した除伐材を、薪や炭として活用したり、一部を製材して利用したりするなど、地域資源の有効活用にまで取り組みを広げており、こうした活動を通じて、持続可能な地域づくりに貢献している。

これまで地域をけん引してきた農家や林業従事者が今もなお活躍を続ける一方で、協議会の若手メンバーも積極的に体験受け入れに参加しており、こうした世代を超えた取り組みが、地域における好循環を生み出している。

(2) 農産物直売所の運営

構成員である「入谷サン直売所」は、平成12年に入谷地区の国道398号線沿いにオープンした、地域住民手作りの簡易な農産物直売所であり、「身の丈に合った、無理のない運営方針」を大切にしながら、週末のみの営業にもかかわらず、駐車場が満杯になるほどの盛況ぶりを見せている。生産者がさまざまな体験イベントに参加することで、利用者との関係性が築かれ、「生産者の顔が見える直売所」としての場づくりを意識し、継続的に取り組んでいることにより、年間約1,000万円の売上を達成している。



写真4 農工房での農作業体験



写真5 入谷の農産物
※南三陸観光ポータルサイトより

(3) 新たな果樹ブランドの確立

令和6年においては、入谷地区に所在する複数の果樹農家が相互に連携し、協力体制のもとで丹念に育て上げた新たなブランド葡萄「しおかぜ葡萄」の販売が開始された。この取り組みは、当初は入谷地区内に限定された活動であったが、次第にその成果と意義が認知されるようになり、現在では町全体へと広がりを見せている。

さらに、「しおかぜ葡萄」の魅力を最大限に活かすべく、地元の飲食店との連携によるスイーツの開発および販売といった新たな展開も進められている。これにより、地域資源を活用した商品づくりが実現し、地域の農業や商業の活性化に寄与するだけでなく、関係者の所得向上にも貢献しており、持続可能な地域経済の構築に向けた重要な一歩であると評価されている。



3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 事業継承の取り組み

入谷の里山活性化協議会においては、地域資源の有効活用と持続可能な地域づくりを目指し、それぞれの施設が持つ独自の魅力や価値を積極的に発信するとともに、構成員が展開する事業の継続性を確保するための取り組みも行っている。

具体的な事例としては、協議会が設立される以前より、旧入谷小学校の跡地は宿泊施設「さんさん館」として利活用されてきた経緯がある。「さんさん館」は、地域住民や来訪者にとって憩いの場であると同時に、協議会の活動拠点としても機能しており、現在ではグリーン・ツーリズムをテーマとした各種イベントの企画・実施の会場として活用されているほか、地元食材を活かした食のメニュー開発の場としても重要な役割を果たしている。

また、旧入谷中学校の廃校跡地を活用して設立された「南三陸YES工房」においては、モノづくり体験を提供する工房として地域内外から高い評価を得ている。令和3年に、旧体育館の活用が可能となったことにより、受け入れ体制が大幅に拡充され、年間で約4,000人から5,000人に及ぶ体験者を受け入れる施設へと成長した。この施設は、入谷地区のみならず南三陸町全体における体験型観光や教育活動の拠点としても重宝されており、地域の交流促進や経済活性化に寄与する重要な資源となっている。

さらに、江戸時代に建築された歴史的建造物である松笠屋敷「ひころの里」においては、地域の伝統文化や農業の営みに根ざした多様な文化的活動が継続的に展開されている。代表的な行事としては、新年の作柄を占う伝統的な正月行事「のうはだて」が毎年開催されており、地域住民のみならず来訪者にも親しまれている。

加えて、地域の養蚕業の歴史を紹介する施設「シルク館」との連携によって実施

写真6 しおかぜ葡萄

※南三陸観光ポータルサイトより



写真7 校舎の宿 さんさん館

されている「シルクフラワーフェスタ」は、地域資源を活かした創造的なイベントとして定着しており、地元の文化や産業の魅力を広く発信する機会となっている。また、松笠屋敷の持つ歴史的な空間や趣のある建築を活かした「落語会」などの催しも定期的に行われており、地域の文化的な厚みを感じさせる場として高く評価されている。

なお、「ひころの里」は令和7年に開園30周年という大きな節目を迎えることとなっており、同年は山内甚之丞の生誕330周年にも重なる記念すべき年である。このような歴史的背景を踏まえ、入谷地区にとっては地域の歴史や文化を改めて見つめ直し、今後の地域のあり方や方向性を考える貴重な契機として位置づけられている。これを受けて、入谷の里山活性化協議会を中心とした記念イベント実行委員会が新たに発足しており、地域全体が一体となって準備を進めている。今後は、地域住民の参画を促進しながら、記念事業を通じて地域の魅力を再発見し、次世代へと継承していく取り組みが期待されている。



写真8

上段：南三陸YES工房とモノづくり体験

下段：ひころの里とシルクフラワーフェスタ

(2) 研修施設の充実

「南三陸まなびの里いりやど」は、研修室や和室、食堂などが整備されており、快適な滞在環境を提供する施設として設立されたものである。加えて、町内の各主要施設からのアクセスも良好であり、利便性の高い立地に位置していることから、様々な目的での利用に適している。



写真9 南三陸まなびの里いりやど

このような施設特性を活かし、東日本大震災以降は、震災の教訓を学ぶことを目的として南三陸町を訪れる全国の学校や企業にとって、宿泊・学び・交流の三要素を兼ね備えた拠点として活用されてきた。震災学習を通じて地域の現状や復興の歩みを理解する場として、教育的・社会的な意義を持つ施設である。

一方で、令和2年以降に発生した新型コロナウイルス感染症の影響により、一時的に宿泊者数が大きく減少するなどの厳しい状況に直面した。しかしながら、感染状況の収束に伴い、宿泊者数や研修の受け入れ件数は徐々に回復傾向を示しており、施設の利用状況も改善されつつある。

さらに、令和5年には新たにワーケーション棟がオープンしたことにより、仕事と休暇を両立させる新しい働き方に対応した高水準のサービス提供が可能となった。この取り組みによって、ビジネスパーソンやクリエイターなど多様な層からの支持を集め、再び施設のファンを増やしている状況である。

「南三陸まなびの里いりやど」は、入谷地区における地域資源のひとつとしての役割を

果たすと同時に、南三陸町全体の来訪者を受け入れる拠点としても機能しており、地域の交流促進や観光振興に貢献する重要な施設であると位置づけられている。

(3) 教育機関等との連携

入谷地区は、豊かな自然環境と高い生物多様性を有している地域であり、これらの特性が注目されることで、企業や大学などの外部機関による研究活動が数多く展開されている。こうした外部からの視点が加わることにより、従来は地域の生産者や住民の目線だけでは捉えきれなかった新たな地域価値が見出されている。このような価値の再発見は、地域づくりに対する住民の意欲や関心を高める要因となっており、持続可能な地域活性化の推進に寄与している。



写真 10 童子山での学校活動

※入谷小学校 HP より

入谷の里山活性化協議会では、地域外からの関心を受け止める体制づくりにも力を入れており、住居や農地の紹介をはじめとする地域資源の案内を行っている。さらに、企業や大学などの外部団体と入谷地区との間に立ち、円滑なコミュニケーションを図ることで、地域外の人々とも心地よく、かつ継続的な関係性を構築することに成功している。

その結果として、少しずつではあるが入谷地区への移住者も増加傾向にあり、地域の人口構成にも変化が見られるようになってきている。また、入谷地区に居住していないものの、志津川地区など町内の他地域から入谷地区へ通って農業や林業に従事する者も増えており、地域間の人的交流が活発化している。

このように、町内において入谷地区へ通う「関係人口」が着実に増加していることは、地域にとって非常に大きな力となっており、今後の地域づくりにおいても重要な要素として位置づけられている。地域内外の人々が関わり合いながら、入谷地区の魅力を高め、持続可能な発展を目指す取り組みが今後ますます期待される場所である。

また、入谷小学校とは、これまでも農業体験をはじめとする地域との交流活動を継続的に行ってきた実績がある。こうした取り組みを通じて、児童たちは地域の自然や産業に触れる貴重な機会を得ており、学校と地域との間には良好な関係性が築かれてきた。



写真 11 小学校の生きもの調査

近年では、地域における農地の保全活動や里山の有効活用に関する情報が学校側に伝わったことを契機として、「子どもたちにもこうした地域の取り組みを知ってほしい」との強い要望が寄せられるようになった。この要望を受けて、かつては途絶えていた地域の山への遠足が再び実施されるようになり、自然環境を活かした教育活動が復活したことは、地域と学校双方にとって意義深い出来事である。

これらの活動は、子どもたちの学びの場を豊かにするとともに、地域住民にとっても文化的な刺激となっており、地域と学校が協働して育む教育・文化交流の好例といえる。